

千葉大学医学部同窓会報 第88号 題字 鈴木五郎

編集兼発行者

千葉大学医学部

あのはな同窓会報編集部

〒280 千葉市亥鼻1-8-1

千葉大学医学部内

あのはな同窓会

電話千葉(0472) 22-7171内線2038

早春所感

千葉大学長

井出 源四郎
(昭和19卒)

本年は殊のほか寒気が厳しうございまして、皆様如何お過ごしでしょうか。しかし、千葉というところは、雪国の厳しい情報などを聞くにつけても、何と住み易い土地柄であろうかと有難い思い、一層の精進をせねばと考えている昨今であります。



この度、あのはな同窓会報編集子から執筆を求められ、先生方にご挨拶申し上げる機会を与えられたように思います。

ましたことは、私にとりこの上ない光栄に存じます。
過剰の情報化時代とは申せ、今日、世界中でいろいろなことがよくもまあ次々と起こるものだとしみじみ思います。そんな状況の中で昨秋には、公務を帯びて中国、西ドイツを放つ機会を与えられました。ご承知のように前者は戦後革命の達成後、幾多の苦難を乗り越えつつ、近代化路線を歩み続けるいわば発展途上の大国であり、片や後者は戦後灰燼の中から

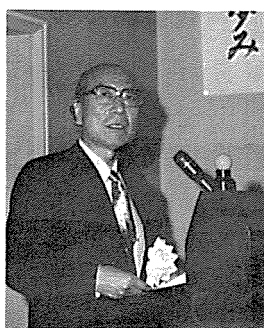
いわゆる奇跡の復興を遂げた国であり、欧州におけるいわば成熟した近代工業国家であります。紙面の都合でその詳細をご報告出来ませんが、この旅は私にとり大変勉強になりました。肌で感じたそんな外国の実感とわが国の状況など比較いたしますと、政治経済あるいは社会の諸々の局面に不安と不満がなければなりません。日本は何と言っても全般的に最も安定感をもった国のひとつと言えるように思います。

しかし戦後四十年を経て、ここ数年来わが国にもいろいろな局面に歪みが見え始めてきたこともまた事実であります。文教の面におきましても改革の波が押し寄せることは必定でありましょう。しかも国家予算マイナスシーリングという沈滞ムードの中で、国立大学は今後どう進むべきかを模索しつつある現在、私にとって時の流れはまことに速く、先生方ご承知の如く、去る昭和五十七年六月の学長選挙以来既に三年有半の歳月が過ぎ去り、余すところ半年足らずで学長の任期を終わろうとしています。

学生数一万一千人を越える、この国で五指に入るまでに膨れ上ったわが千葉大学であります。私は学長に就任の折、ご挨拶の中で内

なる充実に全力を注ぎたいなどと申し上げましたが、今顧みて果たして幾何のことを為し得たか忸怩たる感を禁じ得ません。

編纂子の求めがその間の大学の歩みと現況についてというものでありますので、敢えて列記をさせていただきます。先生方の学びの故郷でもあり、誇りでもあった旧附属病院(現医学部本館)の改修を含めてのキャンパスの整備。西千葉のメインキャンパスでは僅かばかりの校舎の修復と目には見えない配管等地下埋設工事の完成といった程度で、あとは放っておいても育つてくれる植樹の繁茂が、有難いことに自然に学園らしい雰囲気を出し出して呉れております。松戸市戸定ヶ丘の園芸学部キャンパスでは体育館を含む教育棟の新築と、校舎の改築により少しばかり見栄えがよくなりました。柏地区に二十五ヘクタールの新農場敷地を確保出来



野前、田坂、齊藤と三代の教授のもとで過ごされ、昭和

肺病研究施設・第二臨床研究部一和三十四年助教、やがてスウェーデン、西ドイツに留学され、昭和四十四年に教授になられ、肺病の内科を担当された。千葉大学評議員、附属病院院長は

たことは特筆すべきことかも知れませんが、また、安房小湊の水産大学所属であった臨海研究所の本学への移管を果たし、わが国でも数少ない禁漁海域にある研究施設として今後水産、海洋の研究に大きな期待を持つことが出来ることと楽しみにしております。内なる充実という意味では昨年度法経学部と文学部に修士課程の大学院を設置し、今日漸く総ての学部が修士課程が完成し、今年は愈々有望の理工系博士課程が総合大学院として設置されることになりました。

以上考えてみますと、その総てが歴代学長を始めとする全学挙げでの永い努力の成果であると思わずには居られません。余す数ヶ月に全力を傾注して、今後継続すべき計画路線の確立を期したいと念じております。一層のご支援をお願いしてご挨拶いたします。

(一九八六年、立春)

講義の終りに、昨年はからずも大病をし、手術を経験された時の心の動きを語られたのは印象的で、人の中に存りてこそ時は流れる。との言葉は聴衆に多大の感銘を与えた。

なお、渡辺教授の退官記念式典は医学部主催により、三月二十二日、同じく附属病院第一講堂にて行われ、記念講演として、東京大学名誉教授、地震予知連絡会会長の浅田 敏氏の「地震を予知する話」があり、引き続き市内のホテルにて同門会主催の祝賀会が開催された。

『千葉大学・生新聞』「いのはな新聞」等は、本同窓会とは一切関係がありませんので、御注意下さい。(編集部)

教授就任あいさつ

帝京大学医学部臨床病理部長
長尾孝 一(昭36卒)

帝京大学医学部臨床病理部長教授として、同大学附属市原病院に赴任することになりました。これも先輩諸兄の御力添えのたまものと心から感謝いたします。

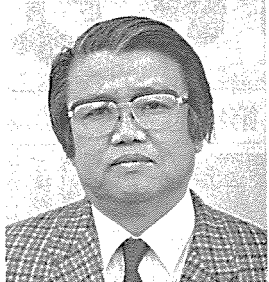
私が病理学の研鑽を志したのは二十年前より以前のことですが、当時、第一病理学教室の教授であられた滝沢延次郎先生に広い視野の上に立つた病理学の手ほどきを受け、その後を継がれた井出源四郎教授の下で人体

病理学の研究に従事いたしました。とくに、滝沢教授からはカシンベック病の研究を通して研究とはいかなるものかをつぶさに学び、

かたわら医学教育の重要性あるいは臨床医学に直結する外科病理学の必要性について深く教えられたことは、今日みずからを顧みて、望外の幸運といわざるを得ません。

思えば不思議なもので、カシンベック病という耳下腺及び骨の慢性疾患の研究が現在の私の専門分野である耳下腺腫瘍、骨腫瘍の研究へと発展させることが出来、一方、滝沢先生が追求された癌腫の基質の研究が胃癌の血管侵襲の研究に大きな示唆となっておりま

す。帝京大学附属市原病院関係記事は第四面に掲載されております。



市原病院は昭和六十一年五月一日に三百十五床で開院し、数年後には六百五十床となりますが、何分にもこれからの病院でございます。当面、松崎 理助教授(昭46卒)、菅野 勇講師(昭47卒)と共にスタートし新しい分野である外科病理学の発展に一層の努力をいたす所存でございます。今後とも、千葉大学医学部はじめ諸先生方との親密な連携が必要と思われましますので、何卒よろしくご指導、ご鞭撻下さいます。よう心からお願ひ申しあげます。

【編集部】

病理学第一講座に

慶応大学医学部より

三方淳男教授着任

四月一日付け発令

井出学長の担当していた病理学第一講座の後任として、慶応大学医学部病理学講座の三方淳男教授が決まり四月一日付けで発令されることになった。

三方教授は昭和七年生、五十三歳、昭和三十三年に慶応大学卒、昭和三十三年より三十七年までセントルイスのワシントン大学に留学、四十六年に講師、四十九年に中央検査部助教授、五十二年に病理学講座の助教授となり、一貫して母校慶応大学で過ごされた方である。

中島博徳教授(昭23卒)

三宅賞を受賞

河野陽一助手(昭48卒)

難病医学研究財団・研究奨励助成金を受ける

小児科の中島博徳教授は、昭和六十年度の「三宅賞」を受賞された。記念講演は「小児と橋本病」であった。この賞は日本内分泌学会甲狀腺分科会の賞で、前の京都大学第二内科の三宅教授にゆかりがあり、甲狀腺研究に貢献した研究者に贈られる。

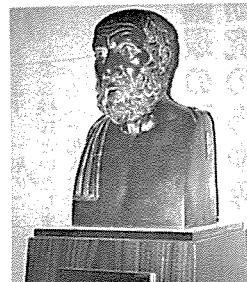
また、小児科の河野陽一助手は「橋本病および Graves 病の成因と治療に関する研究・自己免疫応答にて認識されるチログロブリン化学的解析」により昭和六十年

嶋田宗之先生(昭9卒)

ピポクラテス胸像寄贈される

昭和六十一年一月二十七日除幕

去る一月二十七日(月)午後五時、医学部本館内にてピポクラテス胸像の除幕式が挙行された。高さ約五〇センチメートルのこの胸像は、昭和九年卒業の先輩、嶋田宗之先生より寄贈されたものである。医学の祖、ヒポクラテス(紀元前四六〇―三七七年)を医師倫理の原点として、ことに若い医学徒達に思い起こしてほしいとの嶋田先生の情熱のしからしめたことで、先生御夫妻、大多数の教授ほか多くの列席者の前で、嶋田先生および吉田医学部長の手により除幕され、夕暮の館内にしばし拍手がこだましていた。原型の大理石像は



の経緯があったとのことである。(嶋田宗之：ヒポクラテス像由来記、日本医事新報No三〇一五、六十三―六十四頁、昭和五十七年二月六日号参照) いずれにしても、同形の像は東京大学医学部図書館にもあり、これまた嶋田先生が日本ヒポクラテス協会の緒方富雄会長のたつての願いを入られて、東京大学医学部図書館の創立二十周年記念として三ヶ月前に寄贈されたものである。嶋田先生は「巷間、医師倫理の衰退を憂う声が多い。われらに続く若き医学徒達が、此の像によってヒポクラテスの故事を思い出し、出れば私は満足である」と述べられた。医学部本館を訪ねられたら、正面階段の1階から2階への踊り場に置かれた胸像の重厚さに触れていただきたい。

の難病医研(財)研究奨励助成金を一月十三日に受賞された。

谷口 克教授(昭42卒)

高松宮妃癌研究基金研究助成金を受ける

福富久之筑波大

助教授(昭32卒)に日医医学研究助成費

昭和六十年度の高松宮妃癌研究基金研究助成費の授与が行われたが、本学環境疫学研究所施設疫学研究部の谷口 克教授は、「メラノーマ抗原の化学構造同定と免疫学的特性」で本助成費(二百万円)を受けられた。

また、筑波大学臨床医学系、福富久之助教授(消化器病学)は、「レーザー励起による消化器癌の

蛍光スペクトルおよびその蛍光物質の解明に関する研究」により昭和六十年度の日本医師会医学研究助成費(百万円)を受けられた。

医学専門課程

カリキュラム

改正進む

年配の同窓会員には医学進学課程と専門課程との関係はやや分かり難いかも知れない。規程では二年間の進学課程(教養部、いわゆる医進)を終わらないと医学の専門教育は受けられないことになっている。しかし、比較的余裕のある医進コースに比べ、医学教育内容の増加が著しい専門課程(玄鼻での教育)では益々時間が不足して来ている。このことは本学だけ

の問題ではなく、各大学で時に教養部との間に摩擦を生じたりしている。幸い本学では教養部との関係が円満で、五十九年度から解剖学の大部分と生理学のはじめの部分を医進二年で教えることに踏みきった。それと同時に、授業時間、内容等の改正に着手し、現在、専門課程の二年の前期まで進められた。準備期間を含め数年来、作業の中心である村山教務委員長は、「多年、学生達が口にしてきた、過密授業」という声が消えた。最終学年に臨床経験の時間をさらに増すことを考えている。一部の大学で試みられている「早くから臨床教育を」ではなく、「基礎科目終了を早め、その後は専ら臨床教育を」と改革の方向を語った。

各地るの は な 会・クラス会報告

栃木るの は な 同窓会総会

本年度の栃木るの は な 同窓会総会が、去る昭和60年11月9日、本部より吉田亮医学部長及び新しく麻酔科の教授に就任された水口公信先生をお招きし、宇都宮市内のホテルで盛大に開催された。(毎年秋期)。

恒例により吉田医学部長から学内の近況報告をお伺いした後、水口教授の「ペインクリニックにかかわる諸問題」と題する貴重な学術講演を一同興味深く拝聴した。引続いて懇親会にうつり、和氣あいあいのうちに夜の更けるのも忘れて大いに歓談した。ちなみに本県では、春には宇都宮るの は な 会、秋には栃木るの は な 会総会と年二回の同窓会が開催され、独協、自治の二医科大学および厚生連等の関連病院の諸先生方を中心に、るの は な 会ゴルフコンペも年々盛んで同窓の親睦を深めている。

〔柴崎 晃(昭28卒)記〕



首都圏産婦人科るの は な 会発足

この会は、後記する会則により昨秋発足し、第1回例会を昭和60年10月19日、東京ステーションホテルでひらいた。連絡不十分のためか、出席者は二十名余とすくなかったが、防大小林充尚教授(昭34卒)の「最近の超音波診断の進歩」と題する講演のあと、立食パーティーで親睦を深めた。

昨年11月発行の、るの は な 同窓会新名簿を参考に、この会の名簿をつくり、本年度第2回の案内をする。学術講演のかたくなしい会ではなく、出身校を同じくする産婦人科医が、親睦をかねて実地医家の勉強をする集いを目指す。

小林教授のお話は、同窓の気安さがなければ語れぬような内容もあり、会の趣旨にそった名講話だった。

会則(抄)

目的—首都圏大学の産婦人科

教授、助教授、講師との交流を通じて卒後研修を行う。また、会員相互の親睦を図る。

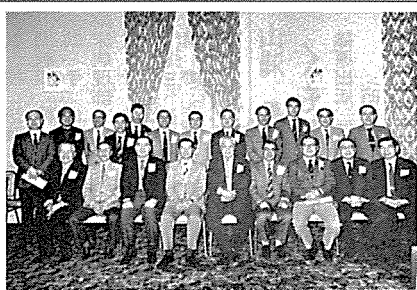
会員—目的に賛同する医師。ただし、千葉大(含医専)卒業生で首都圏に居住する産婦人科医。

対象区域—東京都、千葉県、船橋以西、茨城県、栃木県、群馬県、埼玉県、神奈川県、静岡県、山梨県、長野県。

催会—年間1、2回、目的にそった会合をひらく。

入会—会員の推薦により入会する。ただし、会長の承認を要する。入会金、年会費はなく、会を催すときに講師謝礼を含む実費を徴収する。

会長 中村民比古(昭13卒)
副会長 落合 和雄(昭18卒)
副会長 大村 忠雄(昭21卒)
顧問 田中 洋(昭15卒)
幹事長 村瀬 靖(昭30卒)
幹事長 望月 良夫(昭30卒)
事務局 〒113 江戸川区上篠崎町4-104 村瀬産婦人科
〔文責 望月良夫〕



春秋会

(昭和31年卒、開業医グループ)

秋の例会は、古川裕生君の開業地、九州唐津へ飛んだ。「唐津おくんち」見物に合わせた古川君肝煎りの企画で、名護屋城跡、虹



の松原、七ツ釜など唐津の美しい風光を見物し、玄海灘の新鮮なタイ、ヒラメ、エビ、イカなどなどを肴に老舗「水野」で深更まで痛飲、さらに木棉町へ繰り出して歓を尽くした。

唐津焼を土産に抱いて帰った二日間の旅であったが、我々の心情が天に通じたのか、十一月三、四日は快晴に恵まれ、機中からは紅葉に燃える連山を眺望するというオマケつきであった。当初は「春秋会」初の夫婦同伴の予定が、日航機事故で単身となり、参加者も半減したのは残念ではあったが、まだ子育てが終っていない我々世代としては止むを得ない。

小野清四郎常任幹事の良き引率のもと、喜々として楽しんだメンバーは、海老原雄一、大島一浩、

桑原 久、志村公男、関 光倫、滝沢明祐、辻 輝蔵の諸氏であった。同級生の旅行は気楽で、一匹狼の開業医にはこれほどストレスの解消するものはない。

〔上野恭一(昭31卒)記〕

鈴木五郎先生米寿 祝賀会 綿貫重雄先生喜寿

同窓会名誉会長、鈴木五郎先生には本年八十八歳、綿貫重雄先生は七十七歳をそれぞれ迎えられ、第一外科同門有志約40名が集い、去る一月十五日、千葉市内「春の家」で祝賀会を開催した。鈴木先生は、この一年間病気で寝こまれることもなく、毎日読書、書道、散歩と規則正しい生活を送られており、お元氣な処を皆に披露された。



綿貫先生も至ってお元氣で、殆ど毎日剣道道場通いをされ、後進の指導に励まれておられる。当日の参加者は国立病院勤務者が多く、現在関心事の統廃合問題等に話題

が偏りがちであったが、賑やかな祝賀会であった。

〔奥井勝二(昭28卒)記〕

昭和二十六年卒業生 クラス会

毎年集まりを欠かしたことのない昭和二十六年卒業生は、六十年のクラス会を、去る十一月九日午後六時より新宿の京王プラザホテルで開催した。今回は矢沢知海君が東京都立府中病院長として多忙なところを幹事を努めてくれた。

欠席と返事したがやはり出てきたという者もあり、約三十名が適度に盃を傾けて何時もの通り和やかな会であった。六十二年三月で卒業満三十五年になるし、級友、稲垣義明君が附属病院長でもあるので、久しぶりに母校を訪ねようということになり、杏林大学医学部生理学教授の渡部士郎君が中心となり九月に集まることとなった。

〔村山 智(記)〕

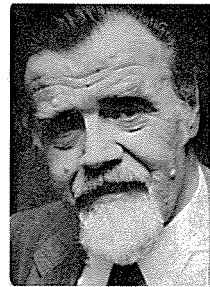
井出学長訪独

昨秋、西ドイツ学長会議等のため訪独の井出学長は、十月二十三日、ゲッティンゲン訪問。高野光司教授(昭33卒)が「二人るの は な 会」と名付けて編集部に報告を寄せて来られた。十月二十四日に大学を公式訪問され、大学提携に関する意見交換、医学部長と会見の後、病理学教室を見学、カムプ学長と昼食を共にされた。午後は高野教授の案内で有名なブレッツェ城趾を訪れ、まさに二人るの は な 会を持った様子である。

本学姉妹提携ゲッティンゲン大学よりヘナチ教授来学

中島 祥 夫 (昭46卒)

ゲッティンゲン大学の生理・病理生理学研究所長であるH・D・ヘナチ教授は千葉大学の文部省特別招聘教授として昨年十月十五日より三ヵ月間、第一生理学教室に滞在され、他大学とも学術交流を行い、活躍された。本学においては、医学部一年生に生理学講義をされ、また生理学実習にも参加され、医学における科学的思考の重要性を強調された。本学全体に対しては、「ゲッティンゲン大学における教育」と題し特別講演を行い、学術研究専門単位群として全学部が改組されたことや、学生問題として、定員を遙かに越える医学部志願者の増加、資格を満たせば誰でも入学できるとする法律と入学に何年も待たされる学生、入学をめぐる大学に持ち込まれる裁判沙汰、にもかかわらず減らされる大学教官と予算のこと、戦後導入した多肢選択方式の試験の結果教科書を読まず、講義に出ず、過去の問題集の暗記に関心を移した多くの学生について話され、とても印象に残る講演であった。



帝京大学附属市原病院 スタッフに二十四名就任

本年五月一日より市原市姉崎に開院される帝京大学医学部附属市原病院(院長、沖永莊一教授)のスタッフに二十四名の本学出身者が就任することに決まった。

- 初年度は全科三十五床でスタートするが、将来はベット数を六五〇床に増やし、学生のベットサイド・ティーチングも行う予定である。
- 内科学…
- | | |
|-----|--------------|
| 教授 | 道場 信孝 (昭35卒) |
| 助教授 | 宿谷 正毅 (昭43卒) |
| 助教授 | 佐野 元昭 (昭43卒) |
| 講師 | 吉田 秀夫 (昭48卒) |
| 講師 | 勝哉 (昭53卒) |
| 講師 | 稲垣 雅行 (昭55卒) |
- 小児科学…
- | | |
|-----|--------------|
| 教授 | 寺嶋 周 (昭38卒) |
| 助教授 | 猪股 弘明 (昭48卒) |
| 助手 | 岡嶋 良知 (昭58卒) |
| 助手 | 竹内 明男 (昭59卒) |
- 泌尿器科学…
- | | |
|-----|--------------|
| 教授 | 川名 正直 (昭39卒) |
| 助教授 | 小林 茂雄 (昭42卒) |
| 講師 | 山本 勇 (昭46卒) |
| 助手 | 平田 貴 (昭59卒) |
- 放射線科学…
- | | |
|----|--------------|
| 教授 | 龍雄 (昭40卒) |
| 講師 | 富山 学人 (昭44卒) |
| 助手 | 岡田 真一 (昭59卒) |
| 助手 | 山内 直人 (昭59卒) |
- 精神神経科学…
- | | |
|----|--------------|
| 教授 | 竹内 龍雄 (昭40卒) |
| 講師 | 富山 学人 (昭44卒) |
| 助手 | 岡田 真一 (昭59卒) |
| 助手 | 山内 直人 (昭59卒) |

- 教授 伊藤 晴夫 (昭39卒)
- 助教授 柳 重行 (昭50卒)
- 助手 山口 邦雄 (昭53卒)
- 臨床病理部…
- 教授 長尾 孝一 (昭36卒)
- 助教授 松崎 理 (昭46卒)
- 講師 菅野 勇 (昭47卒)

書評

山浦 晶 (昭41卒) 著 くも膜下出血

篠原出版、二二頁、三九〇円 (昭和60年10月20日発行)

本書は本学脳神経外科の山浦助教授が、第一回脳神経外科専門医教育研修会で行なった講義をもとにして、過去十年間のくも膜下出血に関する主要論文(延二百数十の引用がある)を精査し、四十数葉のわかりやすい図表を加えてまとめたものである。著者の豊富な

祝 昭和六十年 叙勲、表彰

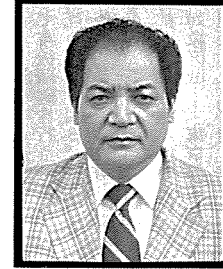
- 勲三等瑞宝章 若山 晃先生 (昭13卒)
- 国保功績者 中山 善夫先生 (昭28卒)
- 厚生大臣表彰 和田 豊治先生 (昭26専卒)
- 国保功績者 国保功績者

人事異動

- 講師昇任
- 堀江 弘 (昭44卒) 病理学第一講座
- 渡辺 滋 (昭47卒) 内科学第三講座
- 帝京大学関係は上段に掲載
- 公立長生病院院長 野村庸一 (昭42卒) 県立東金病院 院外科部長

岩崎 勇君を悼む

藤村 真 示 (昭35卒)



去る一月十四日夜、病理学第一講座助教授岩崎 勇君が心不全のため、全く突然、亡くなった。医学部挙げての懸命の努力も及ばなかった。五十五歳だった。

昭和三十五年卒、滝澤延次郎先生の学風を慕って病理学を志し、五十一年から現職にあった。就中、発癌を中心

三十五年卒といえ、どういう巡り合わせか、それまでであった学部入試制度がなくなることで、その最終試験を受けて医学部に入った。そんな仲間を集めて、戦前、戦中、と隆盛を極めたサッカー部を復活させたが、常に全国レベル

を志向していたという。それから、愛蔵の陶器にしても、窯元に挑まれ、たとえ何年待っても納得のいくものを求めていた。今回の病理学第一講座教授候補選考に当っては、その過程に、それまでに累積していた成果を、昭和五十八年と次の五十九年にはそれぞれ十編以上の、昨年の六十一年中には実に二十編を越す数の論文に當々と纏め上げ、それまでのものと合わせた業績リストを最後に遺して逝った。

如何にも無念。愛称「ガンさん」、岩崎 勇君を悼む。

(生化学第一講座・教授)

編集後記

☆本号より年四回の定期刊行を守つていく方針です。村山 智、秋草文四郎両先生の絶大な協力添えを頂いており、一層豊富な内容をもつ紙面作りを目指して編集委員を増やしていく予定です。

☆本学内科学第三講座の小川道一助教授(昭31卒)には、電気通信大学保健管理センター教授に決定し4月より赴任されます。

☆87号で小野慶三先生の歌集「希望片断」が詩集となっており、また、お詫びいたします。

☆先般、稲生 襄様より編集部宛に御夫君稲生芳文先生(昭12卒)の追悼記「銀杏」の献本がありました。厚く御礼申し上げます。

(徳永 叙)

計 報

- 嶋田 孝男氏 (昭41卒、昭60年10月21日逝去)
- 熊谷 弓應氏 (昭10卒、昭60年11月24日逝去)
- 横山和久里氏 (昭8卒、昭60年12月2日逝去)
- 道具 義孝氏 (昭57卒、昭60年12月2日逝去)
- 木村 輝樹氏 (昭24専卒、昭60年12月8日逝去)
- 鮎沢 要氏 (大14卒、昭60年12月12日逝去)
- 東 恭則氏 (大6卒、昭60年12月18日逝去)
- 岩崎 勇氏 (昭35卒、昭61年1月14日逝去)
- 藤田 一郎氏 (昭19卒、昭61年1月逝去)